

ラブ・コミ!

S a k i & K y o i c h i

十和田 眞

Makoto Towada

termity



エタニティ文庫

C o n t e n t s

夢見る人 5

先照らす人 183

夢の先 311

夢見る人

「あのねえ、君、期限ギリギリで持つて来られても困るんだよね。僕だつて抱えている仕事は沢山あるんだから。その辺ちゃんとかつてる？　ねえ、どうなの？」

季節は暑い盛りを目前に控えた六月下旬。東京の都心部から、やや離れた場所にオフィスを構える中堅企業の経理課。そこで嫌みつたらしく意地悪く、上司が書類を確認しながら若手社員に文句を言う。怒られている年若い男性は、大きな体を縮こまらせて立っている。

「黙つてもわからないんだよね、何か言うことあるんじゃない？」

「本当にすみません！　自分が至らざご迷惑をかけて……」

「ホントそうだよ。ああ、困つたなあ。最近は残業ばかりで家内もうるさくてね。今朝も言われたばかりで、そりゃあ大変で……」

自分から謝罪を促しておきながら、謝られても受け流してねちつくぐちる。こんなやりとりが、もうすでに何度も繰り返されていた。

「また課長の若手いびりだぞ……」

「課長、機嫌が悪いだけでしょ。タイミング悪いところに声かけちゃいましたね」

周囲の社員たちは目配せをして息を吐く。

上司は期限ギリギリと言うが、そこまで切羽詰まったものではない。そもそも軽く目を通せば済む話だ。それを、この世の終わりかのように騒ぐ上司に周りは呆れるばかり。若手社員の何がついていなかっただかと言えば、上司が週刊青年漫画誌を読んでいる最中に声をかけてしまったことだろう。

普通に考えれば、雑誌を読んでいるのだから手が空いていると判断する。声をかけやすいとも考える。ハッキリ言つて、仕事をサボっている最中なのだから、至極真つ当な発想だ。

だけどそんな一般常識が通用しない人種もいるわけで、不運なことに、課長という役職に就いているこの男がまさにそうだった。

ガリガリに痩せ、ほお骨が突出した、一見気が小さそうに見える課長。しかし、彼はいつだつて役職を笠に着て、部下に横柄な態度を取る。

そんな彼が嫌うことは、仕事をサボっている最中に邪魔されることだった。

そうは言つても、仕事に追い回されているときに声をかけても憤慨するのだから、とにかく扱いづらい。

彼の性格をよく知っているキャリアの長い者たちは、いつだつてタイムリングを見計らつて声をかけるのだが、課長との付き合いが浅い若手には見極めが困難だろう。

可哀想なことに、何度謝ろうと課長の嫌味はエンドレスリピート。若手社員も対処に困り口籠もつている。

「……なあ、皇帝はどうした?」

不憫に思いながらも口出しすることができない社員の一人が同僚に問いかけると、話しかけられた社員が課長とは別の方角を指さす。

「営業が回してきた請求書に、露骨すぎる使い込みを見つけたから確認してくるつて言つてました。そもそも、皇帝がいないから課長も雑誌を読んでたんでしよう」

「それはそうだけど。皇帝、早いところ戻つてきてくれないかな」

口にされる、日常生活とはおよそ縁がないだろう単語。社員たちは至つて真面目な顔をして「皇帝」と連呼する。

そうしている間にも課長の嫌味は続き、気がつけば仕事と関係ない話をし始めていた。「息子は反抗期で何言つても反発してねえ。昔は二人でしょつちゅう海外旅行に行ったのに、今じゃ、顔を見ただけで悪態をつくんだよ。まったく、何が息子を変えてしまつたのか。反抗期といえども、私はこうやって汗水たらして働いているわけだから、もっと感謝してくれてもいいじゃないか」

時間が無為に過ぎ去つていく。聞いている他の社員たちも、うんざりした顔。今はまだお昼前だが、このまま、日が暮れてしまうのではないだろうか。

そんな最中、「ただいま戻りましたあ」と聞こえた声。

その声に社員たちが振り向き、課長の体は釣り上げられた魚のように跳ねる。

「皇帝だ!」

「皇帝がお戻りになられた!」

そこにいたのは「皇帝」と呼ばれていた女性。凛とした面立ちの彼女は、スラリと伸びた手足、襟首に微かにかかるショートカットの茶髪で、清潔感がある黒のパンツスーツに茶のパンプスを履いている。

集まつた視線に、当人は一瞬訝しげな表情を浮かべたが、すぐに状況を察知して、課長に視線を送る。ふたたび、課長の体が跳ねる。彼はこっちに来ないでくれとでも言うように両手をブンブンと振つた。だけど彼女は大股で足を踏み出す。

パンプスの踵の音が速いテンポで鳴り響き、そのたびに今まで偉ぶつていた課長の表情は青ざめていった。

そして、若手社員の隣に立ち、デスクを挟んだ向かい側の課長を見据えた彼女が、にっこりと微笑む。だけどそれは一瞬。

次の瞬間には、

「なーしてんですか！」

と、鼓膜を打ち破らんばかりの怒声が響いた。経理課社員たちは揃って体を震わせる。「あ、いや、皇……じゃなかった愛東主任、誤解だよ、僕は世間話をしていただけ」「仕事中に世間話い？抱えている案件は山ほどあったでしょ、頼まれている仕事もあったでしょ、提出期限が近い仕事もあったでしょ！そんな忙しいときに、世間話っ？そんなに余裕があるなら、この前みたいに『手伝ってくれ』って泣きついてきても知りませんよ！」

「そ、それも違った！仕事、仕事の話をしたんだよっ！ほらこれ！」

責め立てられて、課長は若手社員が持ってきた書類を掲げてみせた。印籠代わりにでもしているのだろうか。

書類を眼前まで近づけられた彼女は目を細め、「これじゃ見えないでしょう」と課長の手から書類を奪い、内容に目を通す。

けれど彼女の視線は、書類から課長のデスクに移り、そして――

「……それ、何ですか」

デスクの上に置いてあった、週刊青年漫画誌に辿り着いた。

課長は首が落ちるのではないかと思うほど勢よく頭を下げ、雑誌の姿を確認し、隠蔽しようと手を伸ばす。それよりも早く、彼女の手が動き、雑誌を手に取り机に叩きつ

けた。

「まーた、仕事中に漫画読んでましたね！」

ふたたびそれを拾い上げ、今度は彼女が課長の眼前に雑誌を掲げる番だ。

「気分転換、気分転換だよお……」

先ほどまでの威勢はどこへやら。情けない声を上げながら雑誌を奪い、デスクの中に隠す課長に彼女は一息ついて言う。

「常に人手が足りない経理課ですよ。この子もさっさと仕事に戻して下さい！」

きつめの口調で言われた課長は、肩を落とし、「わかったよ……仕事に戻ればいいだろ……」と不承不承口にする。子どものような拗ね方に彼女の目がきつくなると、「き、気にせず戻りなさいっ！」と言い直した。だけど若手社員は動けない。その様子に彼女は首を傾げる。

「どうしたの？」

「あの、書類の確認を……」

そう言っ、若手社員は眉尻を下げながら彼女の手へ渡った書類を見た。それで彼女はピンと来たのだろうか。

「漫画を読んでる最中に書類の確認を求められ、それに腹立てて文句を言い、無為に時間を過ごしてたってどこですか？仕事もせずにつ！」

ふたたび彼女に闘気が宿る。たとえようない圧迫感、何故か逆らえない威圧感。このままでは、呼吸もままならなくなりそうだ。

「愛東主任、貸してごらん！　すぐに確認するからね！」

課長はやたらと明るい声でそう叫んで、彼女から書類を奪い取る。今の今まで進まなかった仕事があつたという間に前進だ。

一連の流れを見守っていた他の社員たちは「さすが皇帝」と感心している。

しかし、皇帝と呼ばれた彼女、経理課主任の愛東サキは、他の社員たちも睨みつけて「他の人も課長が仕事サボってたら一言言つてやらないと駄目じゃないですか！」と一喝する。

自分たちも怒られるだろうことがわかっていた社員たちは、声を揃えて「はい」と返事をした。

高校卒業後、在学中に取った資格と、実家の家業を手伝う内に覚えた経理の知識を強みに、この会社に勤めだしてもう七年目。

今年、二十五歳になるサキは、勝ち気で姐御気質な女だ。

理不尽なことが大嫌いで、どんな相手でもハッキリものを言う。それで首を切られようが構わない、そんな思いでスーツの内ポケットにはいつも退職届を潜ませていた。何

かあればこれを叩きつけてやるつもりだ。

しかし、こうやって順調に勤務年数を伸ばしている事実が示すように、自ら辞めることも、首を切られることもなく今に至っている。

もの言いがきつく敵を作りやすそうに見えるサキだが、これでなかなか上司からの受けが良かった。

昼休憩、社員食堂の隅っこで食事を食べている人物を見つけて、サキは遠慮なく進み、その正面に腰掛けた。相手は自分を見て、「あいとおしゅにーん」と情けない声を出す。それは先ほど、サキが雷を落とした課長だった。

「もつと優しくしてくれよお、家でも職場でも怒られて泣いちゃうよ、僕！」
「納富課長が怒られるようなことするからでしょ。泣けばいいじゃないですか」

サキは素知らぬ顔でご飯を頬張る。

年齢四十五、隙さえあれば仕事をサボろうとする上司、納富も納富で、先ほど、年若いサキに怒られたことを気にすることなく言い訳を連ねる。

こうやって、どんな相手でも平然と付き合えるのがサキの強みだ。皆が敬遠しがちな人間にも積極的に話しかけるし、意見することもできる。

そうこうしている内に、奇妙な友情が芽生えることもあり、納富との関係もそれにあつた。かと言って、納富に好感を抱いているかと問われれば否と答えるが。

「それにしても、愛東主任は性格がキツイよねえ。恋人も大変だろうなあ。尻に敷かれてそうだよ。愛東主任はお尻がきゅっとしてるから重くないだろうけど」

「そういうこと言うから女の子に嫌われるんですよ。セクハラ対策委員会に報告しますよ」

「それは止めて止めてっ！ えっ、ちょっと待って僕、嫌われてるのっ？」

「少なくとも私は納富課長のことが嫌いです」

「酷いよ愛東主任ー！」

やりとりを聞いて、周囲の同僚たちがクスクスと笑っている。まるで漫才のようなやりとりが楽しいらしい。

「あとですね、何度も言ってますけど、私、恋人いませんから。さもいるみたいな言い方するのは止めて下さい」

箸を持つ手を休め、指先を立て、小刻みに揺らして主張するのに、納富は「そんなはずないだろう」と信じない。

「愛東主任はほら、あれだ、今で言う肉食系女子じゃないか。好きな男はさっさと食って自分のものにしてるに決まってるよ。隠すのは二股してるからだったりするんじゃないのかい？ なかなかの美人だし、魔性だね、魔性！」

「次、そういうこと言ったら、ご飯にコショウぶっかけますから」

凶悪なセリフを吐くサキに納富は震える。その姿を見ながらサキは、また黙々と食事を始める。納富も慌てて食べ始めたが、米の減りだけが早い。

「でも、愛東主任、みんなに皇帝なんて言われてるじゃないか。皇帝は愛人を囲うものだよ」

「周囲が勝手に言ってるだけでしょ。いないものはいないんです」

「いや、ピツタリだと思っよ。怒り狂う愛東主任の恐ろしさは、凄まじいものがあるからね。身が竦むすくというか、抵抗できなくなるといっか。皇帝の名にふさわしい。それで、彼氏は何人いるんだい」

「コショウ取ってくるから待って下さい」

「待って、待ってくれ！ それだけ、愛東主任に恋人がいらないというのが信じがたいってことだよ！」

それは、同僚のみならず友人たちにも言われることだ。

勝ち気で、男女ともに友人が多く、それなりに面倒見も良い自分。

恋人の一人や二人いそうなのに、とみんな不思議がる。

何なら紹介するよと気を利かせてくれる人もいたが、「面倒くさいから」と言って断っていた。

恋愛に興味がないのかと聞かれることもあるが、サキは「そんなことはない」と返す。

すると適当な男はいくらでもいるだろうにと、周囲はますます首を傾げるのだ。たしかに、適当な男はいらぬだろう。声をかければ付き合える人もいるかも知れない。ただ、適当な男には興味がない。

「……そんなことより、納富課長。仕事中に漫画読むのは止めて下さい」

サキは話題を変えるように、納富の所業を蒸し返す。

「だってほら、息子が反抗期だろ」

「言葉のキャッチボールができてませんよ。話す気がないなら別の席行きます」

「いやいや聞いてくれよ。息子が反抗期でね。塾をサボっては友達と漫画ばかり読んでるらしいんだよね」

「納富課長と一緒にじゃないですか」

「そうなんだよ！」

嫌味のつもりで言ったのだが、納富はまったくめげない。

「だから家内が『あなたがそんなだからこの子が勉強しないのよ！』って鬼みたいな顔をして八つ当たりしてきてさあ。今、家じゃ漫画読めないんだよね。そうだったら、職場で読むしかないじゃないか」

納富が仕事中、漫画を読む理屈はひとまず理解した。しかし、納得できるかは別問題。「やっぱりコシヨウ取ってきます」

「待ってくれ、愛東しゅにーん！」

今度こそコシヨウをかけてやろうと腰を浮かせたサキの腕を、テーブルの向こう側から納富が掴む。仕方なく腰掛け、納富を睨みつけると、彼はやせ細った体を小さくして唇を尖らせた。

「仕方ないじゃないか、僕は漫画が好きなんだから。漫画は男のロマンだよ。僕は冒険物が好きだね。旅する主人公が羨ましい。だってほら、僕も旅が好きで世界各国に足を伸ばしてらだろ？」

「月末の忙しい時期に有休使って旅行へ行つたときは、どうしてくれようと思いましたが。そうじゃなくて、漫画が好きなことを注意してるわけじゃありません。仕事中に読んでいることを怒ってます」

「本当は少年漫画誌の方が好きなんだけどね。それは単行本になってから読む派なんだ。息子の部屋からこっそり拝借するんだよ。この前バレて、家内にも息子にも怒られたけどね」

「納富課長みたいな人が家族だったら、刺激的な毎日が送れそうですね。とにかく仕事して下さい」

「いや、そんなこともないんだよ。代わり映えのしないつまらない男だって家内によく言われ……」

「その話、長くなるなら止めてもらえますか？」
 すでにサキの食事の残りは半分以下。納富は米が減っただけで、話すことに必死なのか、ほとんど手つかずのままだ。

「そう言わずに聞いてよ。それにしても、夢を持っていても叶わないものだね」

「どうしたんですか、急に。課長が夢を語るなんて似合わないにも程がありますよ」

「たまに、漫画の主人公と自分を重ねて、その差に落ち込むことがあるんだよ。ほら僕、感受性豊かだから。子どもの頃は、自分が大人になったら格好良く活躍してると思ってただけど、いつの間にか夢を忘れて、忙殺される毎日です……」

「忙殺されるほど仕事してません」

「そこは目をつぶってくれよお！ とにかく！ そうやって夢を捨てて大人になっていくんだねえ」

その言葉に対して、サキは何も返事をしなかった。サキが無言なのを良いことに、納富がまたどうでもいい話を始めたので、適当にあしらひ席を立つ。このマイペースさもサキの強みだ。しかし、必ずしもすべての人にそうできるのかと言えば、実は違う。「例外」が存在するのだ。

一人席に戻り取り出したのはスケジュール表。カレンダーの金曜日に赤丸をつけ、枠内に「恭一君」と書き込んでいる。

竹を割ったような性格で、白黒ハッキリつけなければ気が済まないサキが、肝心なことを曖昧な状態にしたまま、すでに数年。

今日は、金曜日だ。

仕事が終わると、サキは電車を乗り継ぎ、千葉の街に向かう。すでに通い慣れた道のり。駅に降りて早足で進み辿り着いたのは、小さな二階建てアパートの密集地帯。

すっかり日は暮れている。電灯の明かりを受けながら、サキはその内のひとつの前に立ち、バッグから取り出した手鏡で自分の姿を確認する。そんな自分が恥ずかしくなつて鏡を投げつけるようにバッグに戻し、大腿で階段を上ると、サキの足音に合わせて古びた階段からカンカンと音が響いた。

すると、その足音を聞きつけたのか階段を上りきるよりも早く、このアパートの二階、階段脇の部屋のドアが開く。

「サキちゃん……っ」

出てきたのは、いつ散髪に行ったのかと聞きたくなるようなボサボサ髪に、くたびれたTシャツと高校時代のジャージをはいた、見るからにどんくさい男。右手には何故かボウルを持っている。

彼は、大変な事件現場を目の当たりにした目撃者のごとく青ざめていた。

「ど、どうしたの、恭一君!？」

この男が、サキがわざわざ会いに来た相手。

一体何事かと残りの階段を一気に駆け上ると、恭一と呼ばれた男が、「これ……」と言つてポウルを差し出してきた。ポウルを受け取り、サキはひとまずそれを覗き込む。

するとそこに入っていたのは、極々普通の生卵。少し違うのは白身の上に、黄身が二つあること。どうやら双子卵のようだ。サキが卵を確認した途端、恭一が苦しげにつぶやいた。

「この子たち、双子だったんだよ。食用でさえなければ二羽仲良く生まれてただろうに……」

「……」

「僕は何てことを……」

「……どおでもいいわっ!」

サキは思わず恭一を怒鳴りつけていた。彼はたいして気にした風ではなく、「この子たちの親御さんはなんと思ってるか……僕は親御さんに何と言え……」と掌で顔を覆う。

「何も思っていないし、言ったところでわからないよ!」

「そんなこと、わからないよ。今頃泣いてるかもしれない」

「ああ、そうね、でも今じゃなくて朝に鳴くでしょうよ、コケコッコと元気よく!」

「コケコッコ……嘆きの歌……」

「一番鶏の鳴き声に不幸な設定つけないで! 大体それ無精卵だし! もういいっ!

部屋に上がるよ!」

噛み合わない会話。このままでは埒があかない。サキは恭一を押しつけ、部屋に上ろうとした。すると、玄関に足を踏み入れたところで服を掴まれる。

「何よ……っつて、えっ!」

思わず振り返り、視線を上げれば近づいた顔。驚くサキの肩に恭一の頭が乗る。

「サキちゃん……お腹減った……」

しかし、顔を真っ赤にしたのもつかの間。聞こえてきたのは情けない訴えで。

「……は?」

「卵に気を取られすぎて、朝から何も食べてない……」

「……あーもうっ!」

サキは恭一のシャツを掴んで、彼を部屋の中に放り込んだ。サキよりも背が高い恭一がいつも容易く玄関に転がる。サキは靴を脱ぎ、そんな恭一を跨いで部屋の中に入った。こういうとき、パンツスーツは都合がいい。

そして、ポウルを手を持ったまま叫ぶ。

「卵の他に何かないの!？」

「お好み焼きセットが冷蔵庫に……」

床に転がり腹を鳴らす恭一が力なく台所を指さした。冷蔵庫の中を見ると、キャベツや豚肉といったお好み焼きに必要な材料が揃っている。小麦粉も何故か冷やされている。

「何で材料揃ってるのに作ってないの!？」

「その卵をサキちゃんに見せたくて……でも、卵それしなくて……卵がないことには着手できず……」

「だったらお好み焼きじゃなくて、別の物作れば良かったじゃない! キャベツと豚肉の炒めものとか!」

「サキちゃんゴメン……僕、今日はお好み焼きの気分だったんだ……」

「だったら! だったら卵買いに行けば良かったでしょ!」

「双子が無事に生まれていたらどうなってたんだろうって考えてたら、買い物になんか行ける気分じゃなくて」

「あーっ!」

サキはボウルを調理台の上に叩きつけ、頭を掻きむしる。

同じことを職場でやれば、皇帝がご乱心だと皆震え上がっただろう。だけど床に転がる恭一は「でも、こうなった以上ちゃんと食べないと申し訳が立たないよね」とマイペー

スに話を進行している。

サキは恭一を睨みつけてから菜箸を取り、黄身を二つとも潰して思い切りかき混ぜた。

程なく、サキはでき上がった料理を小さなテーブルの上に置いて床に座る。すると彼は起き上がり、料理の前ではなく部屋の奥へと足を進めた。部屋の奥、と言っても、ここは狭いアパート。しかも、奥の部屋には所狭しと本棚が並び、狭い部屋をなお一層狭くしている。

「また増えた?」

「うん、増えた」

そこにあるのは大量の漫画本。それだけではなく、小説や図鑑、風景の写真集等も並んでいる。

彼はそんな本棚の脇に積み上げられた漫画雑誌を、サキに差し出した。

「はい、これ、今週号もろもろ」

「……ありがとう。何か面白いのあった?」

「村瀬先生の読み切りが面白かったかなあ」

「えー。私、あの先生の作品、あんま好きじゃない」

「あの先生は好みが分かれちゃうよね」

「だよねえ。内容がえげつないもん」

そう言いながら、サキは雑誌をべらりと捲^{めく}る。

恭一は箸と水を用意してサキが作ったお好み焼きを食べ始めた。正直、サキは料理がそう上手くはないのだが、彼は黙々と頬張っている。そんな横顔をチラリと見ると、ふいに目があった。思わず身を引いたサキに恭一が「美味しい、ありがとう」と微笑む。その穏やかな笑みに、サキはわざとらしくため息をついた。

夢屋^{ゆめや}恭一。現在、アシスタントで食いつないでいる漫画家志望の青年。年はサキの一つ上で二十六歳。彼は高校時代からの友人だ。

恭一と初めて出会ったのは高校二年の春。

兄二人と弟一人という男兄弟に挟まれ育った影響で少年漫画が好きだったサキは、漫画を描くのが趣味で、漫画研究部に入っていた。

だけど、部内で実際に漫画を真面目に描く人は少なく、仲間がいないと嘆^{なげ}く日々。そんなところに恭一が部活見学に現れたのだ。

せっかく来たのだからと漫画の画材を用意し、「描いてみなよ」と進めると、彼は照れながら慣れないペン軸を使って絵を描き始めた。

原稿用紙にペン先を引っかけ、インクで手を汚しながら、それでも、一見優男^{ゆうなん}風の彼が描き上げたのは、今にも剣を振り回しそうな躍動感のある勇者のイラスト。

その意外性と、自分好きな絵柄に一目惚れし、褒めちぎったら、彼は照れくさそうに笑った。サキはその笑顔にも好感を持った。

そのまま強引に勧誘し続けたら、彼は入部してくれたのだが、春の部活見学に来るくらいだから新入生だろうと思っていたのに、一つ年上の三年生だと聞いたときには胆^{きん}が冷えた。しかし「ため口の方が話しやすいから、そのままで良いよ」と笑った彼の厚意に甘え、同学年のように話すこと数ヶ月。

当初は気づかなかった、どこかズレた性格に振り回されながらも、いつの間にか親しくなり、漫画談義に花を咲かせては描いた漫画を見せあいつこする。

二人で一緒に出版社に持ち込んだこともあった。結果は恭一が編集者から名刺をもらい、サキはボロクソに酷評されるという苦いものだったけれど。

その後、サキは高校卒業と共に就職したため、漫画を描くことを辞めた。どんどん上達する恭一とは裏腹に、伸び悩む自分に限界を感じたのが一番の理由だ。

真つ当な仕事について生活を安定させたいという気持ちもあったので、サキはあのとさの判断を後悔してはいない。

一方、大学に進学した恭一は本格的に投稿を始め、少年漫画誌で賞をとり、勉学に励みながら、漫画家アシスタントのアルバイトを開始した。今では週刊誌連載を抱える先生の下でレギュラーアシスタントになり、忙しい毎日を送っている。

そんな恭一を週に一度訪ね、彼が買った少年漫画誌を読むのがサキの習慣だ。

「……村瀬先生の話、やっぱり合わない。なんか気が滅入っちゃう」

「あはは。今回のはとくにキツイからね」

食べ終えた食器を洗い、濡れた手をタオルで拭いながら、恭一がサキの正面に腰を下ろす。

「ホントよ。よくこんな話思いつくなあ。恭一君のアシスタント先の先生の話は、私好きなんだけど」

「佐世保先生ね。気さくでいい人だよ。奥さんと仲良しでいつもラブラブ」

「へー。漫画家さんも普通に結婚してるんだね……って、そうだ、職場の方はどう？先月入ったアシスタントさんはもう馴れたの？」

自分ができなかったことを実現している恭一。彼の仕事にはいつだって興味がある。すると、恭一はニコニコ笑ったまま、

「それがそのアシスタントさん、連載が決まって抜けることになったんだ」と答えた。

サキは「ええええええええ！」と大きな声を上げ立ち上がる。

「え、だっけいくつだっけ!？」

「今年二十二歳だったかな。ぞろ目だった」

「ぞろ目とかどうでも良いし！ そうだよね、二十二だったよね、若いよね！ えーっ！ えーっ!？」

「そんなに驚くことかな？ ほら、その子の読み切り、サキちゃんも面白いて言ってたじゃない。当然の結果だよ」

サキとは真逆でのんびりした恭一に、サキがブンブンと手を回す。

「ちよつともー、恭一君羨ましくないのっ？ 悔しくないのっ？ 連載、しかも年下の子がだよ！ 恭一君だっけ頑張ってるのにさあ！」

熱がこもるサキに対して、恭一はキョトンとした顔だ。その表情を見ただけで、彼に悔しいなんて気持ちがないことを察知し、サキは肩を落としてうなだれた。

恭一は昔からこうだ。

マイペースというか、人が良いというか。誰かが成功しても、妬んだり悪く言ったりすることがない。

それはとても素晴らしいことだけれど、もっと闘争心を燃やし、のし上がろうとしても良いのではないかとサキは思ってしまう。漫画家とは他者を蹴落としてナンボの世界だろう。

一人ギリギリと歯を食いしるるサキ。それを見守る恭一の顔は穏やかで、それどころか、「サキちゃんはいいつでも全力投球だなあ」とどこ吹く風。

「ちよっと！ 私は今悔しいんだよ！ 悔しがってるんだよ！ たしかに、その新人さんの話は面白かったけど、恭一君の漫画だって……！」

「僕のために怒ってくれてありがと。サキちゃんはカッコイイなあ」

「私のことはどうでも良いから！ 恭一君も、もっと対抗意識を燃やして頑張らないと……！」

「僕は鈍くさいから、誰かと競争しても一人で転んじゃうよ」

「たしかにそんな恭一君想像つくけど！」

「でしょ？ 僕は、自分の描きたい物を描けたら、それで良いんだ」

恭一がニコリと笑う。その笑顔を見ていると何も言えなくなつて、サキはぐつと息を呑んだ。

柔よく剛こゝろを制すとしても言うべきか。

サキがどれだけ毒づいても文句を言つても、彼は怒ることなく柔やわらかく受け止めてしまふ。

職場では皇帝だなんて呼ばれ、上司からも一目置かれる存在であり、どんなことがあつても動じない、肝っ玉の据すわつたサキなのに。

彼を前にすると調子が狂つてばかりなのだ。

だけどサキは、そんな恭一のが好きだったりする。しかも、ずっと片思い。

恭一にとつてもサキは近しい存在で、仲が良い人間を挙げるとき、三本の指には入るはずだ。しかし、二人きりでいても色気のある展開になんか一切ならず、絵に描いたような健全な友情を育んでいる。

そもそも、恭一は女なんかよりも、双子卵の方に俄然興味があるし、何よりも、いつだって漫画第一だ。

サキの上司である納富は夢を諦あきらめて大人になつていくと言つていたけれど、こうやつて夢を追い続ける人間もたしかにいる。たくさんのリスクを背負つてもだ。

漫画の収入だけで飯を食える人間なんかほんの一握りだろう。

恭一は不安にならないのだからかと思ふときもあるが、それを口にするのは憚はばられた。そんなネガティブな質問、できるはずがない。だってサキは恭一に、漫画家として大成して欲しいから。

「そうだサキちゃん、ネーム描いたんだ。見てくれる？」

会話が途切れたのをきっかけに、恭一がクリアファイルから漫画のネームを取りだした。

漫画の骨組みであるネームには、作品の内容が大雑把おろそかに描かれている。

簡略化して描かれているため、人が見たら子どももの落書きのように読みにくいけれど、サキは手慣れた物。B5判用紙に走り描きされたネームを熱心に読み込む。予想は

していたが、主人公は双子だった。朝、双子卵を見て描き出したのだろう。何だつてネタにするのだから。その創造性には感心する。

用紙は全部で三十二枚。一気に読み終えたサキは、一つ頷き、「面白いよ」と答えた。サキの感想を聞いて、安心したように恭一が目を細める。

「キャラクターはどれが好き？」

「この女の子が好き。清書してみてよ」

「うん」

ネームの状態では、キャラクターも省略して描かれている。きちんとした姿が見たくて恭一にねだると、彼は真っ白な紙を一枚取り出しテーブルに置いた。

「それじゃ、描くね」

ヘアバンドで前髪を上げてペンを握ると、たちまち笑みが消えて、彼のペンが走り出す。クセなのか、時折薬指を噛みながらも、なめらかに走る線が作り出す命。

そんな彼の横顔を、サキはじつと見つめていた。

ファッションに頓着がなく、髪もボサボサで、どう見ても地味な恭一だが、実はなかなか顔が良い。鼻筋はすつと通っているし、笑みを絶やさないので見落としがちだが目は弧を描くように釣り上がっていて、どこか涼しげだ。身長だって、一般女性よりも高めのサキが少々ヒールの高い靴を履いても問題ない高さ。

美容院で髪を切り、オシャレな服を着て街を歩けば、女の子が放っておかないだろう。(ま、恭一君はオシャレにも女の子にも興味ないけどねっ！)

その女の子に自分も入ることを考えると落ち込んでしまう。そんな自分が憎らしい。職場では肉食系だなんて言われているのに、一体どの乙女だ。

でも仕方ない。恭一を前にすると、こうなってしまうのだから。

サキは集中する恭一を横目に見ながら、ふたたびネームに目を落とす。そして、彼にバレないように息を吐いた。

画力はあるし、丁寧に作り込まれたストーリーの構成力も抜群だ。

だけど彼の描くものには一つ大きな欠点がある。

それは、キャラクターの魅力だ。

彼が描くキャラクターは「良い子」ばかりで個性が乏しい。悪役でさえ悪者になりきれず、中途半端に優しさを見せる。

さらにキャラクターたちは感情の起伏があまりなく、物語を通して成長が感じられなれどが多かった。

例えるならば、味つけが薄く、お腹に優しい病院食のよう。

多分恭一自身が優しいから、人間の醜悪を上手く表現しきれないのだ。

そんなところも含めてサキは恭一の作品が好きで、魅力的だと感じている。だが、世

間もそう思うかと言えば、厳しいものがあるだろう。それは、恭一自身も感じているはずだ。

過去に一度、読み切り漫画が雑誌に載ったことがあるが、鳴かず飛ばずで、「上手いけれど、物足りない」、それが彼に対する評価だった。

今も担当編集者にネームを持っていつてはいるが、ボツを食らってばかり。それでもへこたれない強さには感服する。しかし、いつまでもこの調子ではいけないとサキは思っていた。

しかし、サキが思ったところで恭一はご覧の通り、人に卑しい気持ちを抱くことなく、たいそう健全に生きているのでどうしようもない状態なのだ。

人間、生きていくには多少の欲も必要だと思っけれど、恭一が欲をかく姿なんて想像つかない。

「描けたよー」

そんなことを考えていると、恭一がイラストを描き上げサキに渡してきた。

B5判の安っぽい紙に描かれているのは、躍動感がある少女の姿。それを見て、サキは「可愛い！　ありがとう！」と素直に喜びはしゃいだ。

ちゃんと保存しておかなければとバッグの中からいそいそとファイルを取りだし、丁寧にしまう。その姿を見て恭一が顔を綻ばせて笑った。

「サキちゃんは格好いいけど可愛いよね」

両手が跳ね上がり、ファイルが床に落ちる。

……可愛い、私が？

「彼氏とかできたらキヤッキヤはしゃいだりするのかな。恋バナするサキちゃんを見てみたいかも。彼氏ができたら、真っ先に教えてね」

だけど、続いた言葉にサキの眉尻が一気に上がる。

サキは落ちていたファイルから絵を抜き取り、空になったファイルを手早く丸めてから、恭一の頭を殴りつけた。その衝撃で恭一のヘアバンドが吹っ飛ぶ。

「今日、課長にも恋人いないのか、いるんだろってしつこく言われてムシヤクシヤしてるところなの！」

本当は納富など関係なく、恭一にそんなことを言われるのが嫌だったからなのだけれど、素直に言えるはずがない。だから、そんな言い訳を咄嗟に作り口に出す。

すると恭一はシユンとなって、「ゴメン、僕、デリカシーのないこと言っちゃったね……」双子の親御さんにもサキちゃんの親御さんにも面目が立たない……と落ち込んだ。

「双子の親って、まだ卵のこと気にしてるのっ？　あと、この程度のことであちの親に面目立たないとか大袈裟にも程があるから！　そんな風に落ち込まれたら、むしろ困る！　大体、ファイルで殴られたんだから、恭一君が怒っても良いくらいじゃない

の!?!」

「サキちゃんに殴られると気合いが注入されるんだ。だから平気だよ」

「私はどこぞのプロレスラーじゃないわよー!」

「そりゃそうだよ、サキちゃんプロレスやってないし」

「そういう切り返しは求めてないから! もういい! キリないっ」

いまいち噛み合わない言葉のやりとり、最終的に折れるのはいつだってサキだ。ぐったりしながらファイルに絵を入れ、バッグの中にしまいこむ。

「そろそろ帰る時間?」

恭一が時計を確認しながら聞いてきたので、「ポチポチね」と答えた。本当はもっといたいけど、恭一は明日仕事だ。

漫画家の仕事というのは、自分たちとは違う時間軸で動いている。

恭一は土曜日から火曜日までが仕事。原稿が終わらなければ職場に泊まり込み、徹夜で戦わなければならない。長居をしては迷惑だろう。

「じゃあ送るね」

「別に良いよ」

「ううん、危ないから。サキちゃんが道行く人を襲ったりしたら」

「襲わないわよ!」

「とにかくね、送るよ」

名残惜しそうにしながらも立ち上がった恭一のとに続いて、サキも静かに家を出た。

「……いつつもゴメンね、サキちゃん」

駅までの道中、並んで歩きながら、ふいに、恭一がそんなことを言う。

「え、何が?」

「いつも遊びに来てもらっちゃってさ……」

「私が勝手に上がり込んで、漫画読ませてもらってるだけじゃない。それを言うなら私の方がごめんなさいだよ」

どう考えても自分の方が図々しいのに。恭一は「ううん」と首を振る。

「でも、金曜日のアフターって、OLさんが一番盛り上がる時間じゃないの?」

「またその話!?!」

空気を読まず蒸し返す恭一。サキを怒らせることなんか怖くないのか。それともしよっちゅう怒られているから慣れてしまったのか。

「だって心配だからさ……。サキちゃんに彼氏ができないのって、もしかしたら僕の家遊びに来てくれてるからじゃないかって。サキちゃんだってそろそろ結婚を視野に入れる年齢で……」

「う、る、さ、い！」

食い下がる恭一の脇腹を肘で突くと、恭一が「うっ」と呻く。なのにやっぱり笑顔で「効くなあ」なんて言う彼にため息が漏れた。

「あのね、恭一君！ 自分で漫画買う暇ないし、こうやって思う存分漫画談義ができる人もいないから、恭一君のところで漫画読むのが私の息抜きで安らぎなの。以上！ 文句あるっ？」

この話はもうお終い、と打ち切って、サキは早足で進む。

すでに駅が見えてきた。また来週までお別れだ。

本当は、学生時代ほど漫画に執心しているわけではない。漫画はたしかに面白いけど、楽しいけど、自分の生活に絶対なければいけないものかと問われれば、首を横に振ってしまうだろう。だけど、恭一の描く漫画は今でも本当に好きだ。惚れた欲目ではなく、彼の描く話が好きなのだ。

「……ありがとうね、サキちゃん。僕も、職場と家の往復で、引きこもってるから……サキちゃんが来てくれて、癒されてるよ」

そんなサキの背中に、うしろを歩いている恭一からポツリと落とされた言葉。

サキは振り返らずに手だけ振って、

「こんな乱暴者相手に癒されるとか、どんだけ人恋しいのよ恭一君！ ……あ、そろ

そろ電車来る時間だから走るね！ 今日はこちらまで良いから！ ジャーね！」

そうしてサキは全速力で走り出す。

「サキちゃん、また来週！」

「はいはい！ 来週！」

「来週、サキちゃんが来る日には卵割らないから！」

「どうでも良いけど。それじゃあ、まあ、そうして！」

決して振り向くことなく駅まで走り、切符を買って、そのままホームまで駆け上がり、ちようど良く来た電車に飛び乗った。

運良く空いていた座席に腰掛けたサキは、ぐっと体を縮こまらせる。だけどそれだけでは我慢できずに両手で顔を押しさへ込んだ。

「……あー、ダメだ。恭一君のこと好きでしょうがないわ、私」

片思いなのに、報われないのに、些細な一言で舞い上がる、顔がにやける。

緩んだ頬が憎らしく、だけど、幸せで。最終的には「なんてお手軽な女なんだ」と自分で自分に冷水をかけることで心を落ちつけようとした。それでも弾む心は止められない。

告白したらどうなるのだろうかと考えたことは、一度や二度ではない。うっかり「好き」と言ってしまうようになったこともある。

だけど、告白することによって失うものが頭を過ぎり、サキの心にプレーキをかけた。今だって十分幸せだ。それなら友人のまま、恭一の夢を応援していきたい。

……ああ、なんて乙女なんだろう、私。

そう思いながら、ようやく熱の引いた顔を持ち上げる。そこで、携帯にきているメールに気がついた。

上機嫌のまま確認したけれど、内容を見るなり気分が一変する。それは、職場の後輩、今日、納富に叱られていた男性社員から。

『納富課長が、月曜の朝までに終わらせなければいけない仕事を手つかずの状態で放置してたそうです。それで、帰り際にお前がやっておけて言われて……。俺、どうしたらいいでしょう、主任……』

サキは眉間を押さえて顔を伏せるが、気をとり直してすぐに顔を上げた。

『とりあえず、納富課長に連絡してみるから待ってて』

怒りを抑えてメールを返信。

「……あんにやるう、絶対ぶっ飛ばす」

乙女の顔はすでに皇帝の顔に変わっていた。

2

後輩からの SOS を受け、即座に納富に連絡を入れたサキだったが、無念にも納富は捕まらなかった。一言で言うならばシカトされたのだ。問題を先送りにしたってサキの怒りが増すだけだというのに、あの男はいつだってそんなことをする。

仕方なく翌日の土曜日に休日返上で会社に行くと、仕事を押しつけられた一つ年下の後輩が狼狽した様子でサキを待っていた。

「愛東主任、本当にすみません！俺が至らないせいで……」

「別に仲江君が悪いわけじゃないから」

淡々とそう答えるサキに、彼は肩を落としながら、「愛東主任には助けってもらってばかりです」と頭を下げた。

彼の名前は仲江陽太。学生時代、スポーツで腕を鳴らしてきたらしく、しっかりと筋肉がついた逞しい好青年だ。しかし、サキの前では萎縮していることが多く、サキの方が大きく見える。

一つしか違わないとはいえ彼は大卒。高卒で働きたサキとは勤務年数が違うのが

大きな要因だろう。

仲江はさっぱりと切りそろえられた頭を搔いて、「すみません」を繰り返す。サキはうんざりした表情で腕を組んだ。

「あのねえ。そう何度も謝られたら、こっちも悪いなって気分になるでしょ」

「あ、そ、そうですね、すみませ……」

「ほらまた。いちいち謝らなくて良いから。仲江君は悪くないし、私も悪くない。いつまでもうなだれてるより、仕事を進めた方が建設的よ。ほら、見せて」

「あ、はい！」

サキは仲江が納富に押しつけられた仕事を受け取り、内容をチェックする。

「……p。」

「どうしました？」

月曜の朝までに仕上げなければいけない仕事だと聞いていたのに、確認してみればどれも半月後くらいにあればいいものばかりで拍子抜けした。

早くするに越したことはないが、休日を返上してやるほどでもない。

ならば何故、と考えて一つため息を吐く。自分でやるのが面倒くさいから仲江に押しつけただけだろう。無責任にも程がある、納富らしい所業だ。

仲江も緊急の仕事ではないと気づいても良さそうなものなのに。上司から命令口調で

言われれば疑問は多々あれども、相手の言葉を嚙呑みにしてしまうものだろうか。

サキだったらどんな相手だろうと間違っていれば噛みつくのだが、それは自分の勝ち気な性格の成せる業で、仲江の感覚の方が一般的かも知れない。

それにしても、納富の傍若無人っぷり。サキはもう一度、盛大に息を吐く。

「仲江君、これ別に急を要する仕事じゃないわよ。納富課長のデスクの上にバラまいて帰ろ」

「ちよ、ちよと待つて下さい愛東主任！ ああ、放り投げないで……っ」

さすがにバラまくことはしなかったが、サキは軽くポンと納富のデスクに書類を放つた。広がった書類を仲江が慌ててかき集め、書類の束を軽く整えてからぎゅっと胸に抱え込む。まるで書類を守っているようだ。

「でも、俺、任されましたし……」

「押しつけられただけじゃない。ほっとけば良いのよ」

「でも……」

仲江は書類を抱きしめたまま、怖々とサキに視線を向ける。

「任されたものは、やっぱりしておかないと……。急ぐ仕事じゃないって聞いて、だいぶ気が楽になりました。俺、これやってから帰ります」

そう言って、仲江は明るく笑ってみせた。ここは先輩として、仕方ないわねと微笑ん

でやるべきシチュエーションなのかも知れない。後輩の踏ん張りを褒めてやるべきなのかも知れない。

しかしサキは眉をつり上げ、

「こうやって言うこと聞く人がいるから、納富課長がつけあがるのよ！ 甘やかしたら

ダメ！」

と一喝した。

何だかんだで納富を甘やかす人間がいるから、彼はこんなにも奔放にできるのだ。経理課社員全員がサキのように対応すれば、納富だって自分で仕事をせざるを得ないだろうに。

サキの剣幕に、彼女よりもずっと大柄な仲江がビクツと竦む。サキのことが恐ろしいことこの上ないのだろう。

そんな彼の顔を一瞥してから、サキは仲江の胸にあつた書類を奪い取った。

「……ここで仲江君が仕事放りしたら、納富課長にいびられるのは目に見えてるし。二人で手分けして、ちゃつちゃと終わらせるわよ」

今まで、納富の若手いびりの犠牲になった社員は数知れず。これしきのことは我慢してやり過ぎせばいいのにも思うこともあったが、「付き合い切れない！」と泣きながら辞めていく仲間たちを見るのは忍びなかった。

それに、いつまでも若手社員が馴染まず入れ替えが激しいままだと、こちらにも負担が来る。

仲江は、こう見えてなかなか打たれ強いし、納富相手に良くやっている方だ。何より真面目で責任感がある。長く勤めてもらうに越したことはない。

だったら彼の立場が悪くなることは避けるべきだろう。

自分がいれば納富を御すことはできるが、四六時中、仲江と一緒にいるわけじゃない。サキがいなるときを狙って今日のことをネチネチ言われたらたまらない。

「え、え、どういうことですか？」

事態が呑み込めない仲江に、サキは「私も手伝うから」と言ってやる。すると、仲江の前屈みだった体がぐっと伸びて、不安顔が一気にやわらいだ。

「愛東主任、ありがとうございます！ 俺、俺、愛東主任のそういうところがすごく好きです！」

「はい、どーも。じゃあ仕事するわよ」

サキがその言葉を軽く流すと彼はまたすぐに肩を落としたが、それでも嬉しそうだ。サキは仕事を分担して自分のデスクにつき、電卓を叩き始めた。

休日だというのに普段と同じ時間に出勤し、仕事をする数時間。あらかた片づい

た所でサキは、「そろそろ切り上げようか」と仲江に言う。

「でも、まだ少し残ってますよ？」

「全部したらしたで、機嫌悪くするかもしれないから」

楽したいが故に人に仕事を押しつける納富だが、それだけではなく、若手社員が困る顔を見て楽しんでる節もある。そのため、週明けに仕事を完璧に終わらせてやりきった顔なんかしていれば、腹を立て、次はもつと大変なことをさせようと考えかねない。

「やりきらずに仕事返せば、軽く嫌味を言われるかも知れないけどね。ちよつと言わせしておくくらいの方が後々楽だと思っから」

「そうなんですか。俺、その辺のさじ加減がまだわからなくて……勉強になります」

「私だってわからないときもあるけど。そういう傾向があるってことよ」

納富の機嫌は山の天気のようにコロコロと変わるのだから、参ったものだ。

「いえ、それでも、あの納富課長と渡り合えるってだけで尊敬しますよ。他の社員達もみんなそう言ってます。どうして愛東主任はあんな風に上手く付き合っているんだろうって」

帰り支度をしながらサキは軽く肩をすくめ、

「慣れちゃったんじゃないのかな。何だかんだで付き合い長いし」

と、答える。しかし仲江は首を横に振った。

「付き合いが長いのもあるかもしれませんが、俺が同じ年数働いていても、こうはなれませんよ」

目をキラキラさせてそう言う仲江は、主に忠実な大型犬のようだ。サキはデスクを綺麗に片づけてから机に肘をつき、納富との関係を考える。

「……友達が、ね」

「え？」

「友達が、ああいう感じで、ちよつと人と会話のテンポが違うのよ」

サキの脳裏に、前日、双子卵を嬉々として見せてきた恭一の姿が過ぎった。

ちよつと人とずれた間の男。

「納富課長と同じような人ですか？」

仲江は顔を引きつらせる。

サキはヒラヒラと手を振り、「その子は底抜けに良い子。お花が咲いてる感じ」と補足した。さすがに、納富のようなタイプとは友達になれないし、なる気もない。

仲江はすぐに表情を崩したが、納富と同じテンポというだけで悪いイメージが拭い去れないのか、「大変じゃないですか？」と尋ねてきた。

そういうえば、高校時代の漫画研究部の他の部員たちも、「夢屋君ってよくわからない」と一線引いていた気がする。

恭一のことを嫌いだと言う子はいなかったが、苦手意識がある子は少なからずいただろう。

『夢屋君とよく会話が続くね』

そんなことを言われたことも、一度や二度ではなかった。

「大変大変。何て言うか、何するかわかんないもん。こっちは振り回されてばかりよ」
「愛東主任が振り回される姿って、想像つかないです」

「納富課長とは仕事上の付き合いだし、ある程度割り切って対応できるからいいんだけどね。その友達に関しては『こうしてあげたい』とか、『こうなって欲しい』とか、私の願望も入ってくるわけよ。だけど相手はやっぱりマイペースで、私の思いと相手の気持ちが噛み合っていないときもある」

そうなのだ。酷い話ではあるが、納富には期待というものをしていない。仕事に支障がない程度に働いてくれたらそれで良い。

しかし、恭一には頑張ってもらいたいし成功してもらいたいから、感情が先走り食い違うのだ。その辺、自分も乙女だと思う。こんなこと、同じ課の人間に話しても笑われるだけだろうが。

「仲が良いんですね」

サキの話を聞いて、『テンポがズレた友人』に対しての悪いイメージが払拭されたのか、

仲江が微笑ましそうにそう言った。

「仲は良いよ。何か、私がついてあげなくちゃ、って思わせるところもあるし」

「可愛い子なんでしょうね」

「可愛い？ うーん、まあ、そうね、可愛いかもね」

何か誤解されているかも知れない。そんな気がしたが、とくに気にせずさりと返した。そして、話を切り上げて帰ろうとイスから腰を上げかけたところで、仲江が「そういうえば」と言葉が続けてくる。

「愛東主任って、本当に退職届をいつも持つてるんですか？」

他の社員に聞いたのだろうか。別に出し惜しみするものでもないの、サキは「持つてるよ」とスーツの内ポケットから退職届を取り出した。

「うわ、ホントだ、す、すごい……！」

仲江は目を丸くする。いちいちオーバリアクションな男だ。

「これ、出したことはありません？」

「出すときは辞めるときだから」

「ど、どんなときに出すんですか？」

「自分の正義を貫き通せなくなったとき」

スパンと言いつ切ったサキに、仲江が自分の体を抱きしめるように腕を回してブルリと

震える。

「か、格好いい……！ 惚れ直します！」

まるで、小さな子どもが憧れていたヒーローにでも会ったかのような感激の仕方だ。サキは退職届をふたたび元の場所に戻して、ぼん、と胸を叩いた。

「勤続年数を重ねるたびに、そう簡単に辞められないなって思うようになってきたけどね」

「そうなんですか？ あの、失礼ですけど、女性って、年数を重ねれば重ねるほど職場が居心地悪くなるものかと……」

腕を解き両手を広げつつ語る仲江にサキはフツと笑う。

「そういう人もいるだろうけど、私みたいな人も多いと思うよ。仲間を残して辞められないでしょ」

「！」

「大体ね、自意識過剰かも知れないけど、私が抜けたら一体誰がこの経理課を守るのよ」自意識過剰、という言葉をつけはしたが、実際、サキがいなければ経理課は回らないだろう。それは誰もが認めている事実である。

「愛東主任……！ そうです、経理課の命運は愛東主任の手にかかっています！ 愛東主任あつての経理課です！」

仲江は感極まった様子で拳を握る。体育会系なので、こういったノリが好きなのかも知れない。

「私は気が強いから、仲江君を叱ることもあるし、もしかすると傷つけることもあるかも知れない。でもそれは、大事な後輩で、期待してるから言ってるの。あと、納富課長から守らなきゃとも思ってるから。今回のフォローも任せといて」

「ありがとうございます……っ」

そう言つて、仲江が机を叩くようにして立ち上がった。さらには手を伸ばし、サキの両手を掴んでくる。思いの外、力が強い。やはりそこは男性か。

「愛東主任、俺、俺、……そんな愛東主任のこと、好きです！」

「ありがとう。じゃ、帰ろうか」

勢いづいて思いの丈をぶつけてきた仲江。しかし、サキは仲江の手から素早く両手を抜きだし、バッグを掴んだ。そんなサキのつれない素振りに、仲江は激しく落ち込んだ様子でデスクに腕をついている。

「なに肩落としてるの、帰るわよ」

サキはさっさと歩き出し、振り向きながら声をかけた。すると、「俺、諦めませんからあ！」という、会社中に響き渡りそうな雄叫びが聞こえた。

「仕事に燃えるのは良いことよ」

仲江を華麗に受け流して、サキは会社をあとにする。

町の雑踏に入り込み、見知らぬ人々に紛れることでようやく精神的に一人の空間を作れたサキは、街路樹やビルの先にある空を見上げた。

「……告白したところで叶わないことも多いのよね、結局」

仲江のストレートな告白の仕方は、ある種好感が持てる。けれど、恭一が好きだから云々ではなく、仲江を男としてまったく見られないので応えようもない。

だけど仲江をあしらうたびに思う。恭一も自分と同じように、サキの気持ちに気づいていながら、いや、気づいているからこそあんな風に捉え所のない回答ばかり繰り返し、誤魔化しているのではないかと。

こんなにも長い間、「友人」という関係から抜け出せないのだから、今さら進展なんかあり得ないのかも知れない。

それから、不安がもう一つ。

学生時代とは違い、お互いの生活範囲が異なっている分、共有できない事柄が増えてきた。

恭一が漫画の世界にどっぷり浸かり日々暮らしているのと同じように、サキは社会の歯車の一つとしてこうやって会社で働いている。

職場の人間と過ごす時間の方が長いし、何かあれば優先しなければいけないのは仕事

の方だ。

そんな小さなズレが、いつしか大きなひずみを作り、二人の友人関係さえ壊してしまいかも知れない。

「だからって、恭一君との関係を割り切ることができると言えば、そうじゃないのよね」
まったく、恋愛感情とは厄介なものだ。サキは視線を正面に戻し、歩き出した。

その翌々日の月曜日、サキは納富が出勤するなりひつつかまえた。わざわざ自分が休日出勤したことも含め、責め立てる。納富は、ごめんごめんと平謝りだ。

「期日に余裕があるものを、急な仕事だなんて嘘ついて！ 少しでも手伝って、私は帰りましたよ！」

サキのその言葉に、仲江は面食らった表情。なぜならサキはキリが良いところまで働いたし、片づけた仕事量はサキの方が圧倒的に多かったからだ。

しかし、サキは、「今度どういうことしたら許しませんからね！」とだけ言って席に着いた。入れ替わるように仲江が納富に書類を持っていく。

「すみません、全部は終わらなかつたんですけど……」

彼はこれで良いのだろうかと不安げにこちらを見たが、サキは素知らぬ顔で自分の仕事を開始する。

「ちよつと見せたまえ。ああ、ホントだ、全部は終わってないねえ。まあ、若手なんてそんなものだろうけどね、別に期待してないよ」

仕事を押しつけておいて、何が期待してないだ。サキは納富をジロリと睨みつけた。サキの刺すような視線を受けた納富は、「でもこれだけやれば十分かな！ もう良いよ、戻りたまえ！」と話を打ち切る。

予想通り、多少の嫌味はあったが、これなら許容範囲内。納富も仕事がある程度片づいたので機嫌を良くしている。

現金な人だと思いつながら、頭を下げた仲江に軽く首肯する。また、いつもの一日が始まった。

これがサキが生きる世界。今頃、恭一はどうしているのだろうか。金曜日までが遠い。

3

何も変わらぬ日常が繰り返され、季節はいつしか夏へと移った。

暑がりな納富が目を離れた隙に冷房の設定温度を極端に下げたため、「寒いでしょうが！」と文句を言い、設定温度を上げるといふまったくもって生産性のないやりとりを

繰り返す。

いつも通り金曜日に恭一の家を訪ねると、彼は相変わらずだった。

「サキちゃんはバニラアイスで塔を作るなら、どんな塔を作りたい？ 僕はエッフェル

塔とか良いと思うんだよね」

「私はバニラアイスが今ここにあれば、ただ食すだけよ」

「でも、アイスのエッフェル塔を見たら視覚的にも涼しくなるんじゃないかなあ」

「それどころか、物理的にも涼しいですよ。何故なら、エッフェル塔を作るまで溶けないほど室温が低いつてことだからね！ それにしても何なのこの部屋、暑すぎる！」

恭一との会話の果て、サキは手にしていた漫画雑誌を思い切り閉じ、黙り込んだままのエアコンを指さした。

「うちの職場の冷房の効きっぷりには辟易するけど、恭一君の部屋の暑さも異常だよ！ 何でエアコンつけないの？ 今こそ使うべきときでしょ！」

日が暮れたとはいえジメジメとまとわりつくような暑さがあるこの夏日に、部屋の窓という窓を全開にし、暑さを凌しのごうとしている。入り込むアスファルトが蒸されて発する熱を帯びた生暖かい風に、おかしくなりそうだ。

「つけたらドライヤーばりの熱風が吹いてくるんだよね。だからつけない方が涼しい不思議なエアコンなんだよ」